

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区  
夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

広島市の友人から手紙が来た。原爆で全滅した私のクラス——広島第二県女二年西組の生き残りの一人である。開けてみると、今年から同窓会としての慰霊祭をやめ、自由参拝にするという。いつかはこの日が来ると思っていたが、複雑な思いで、手紙を読み返した。広島市国泰寺町——市役所裏手の一角に、第二県女と広島女高師付属山中高女の慰霊碑が仲良く並んでいる。戦後の学制改革で廃校となった二校が、多くの生徒が疎開地後片付け作業中原爆にあい死んだこの地に、町内会の好意で慰霊碑を建てさせてもらっている。廃校になっていたので、一番若い同窓生も六十歳を超えた。同窓生全員が死に絶えても原爆の犠牲者の慰霊ができるように、町内会には「永代供養」をお願いしている。だから、慰霊祭は、昨年と同じように今年も行われるのだ。

## 慰霊碑の中から友の 声が聞える

関 千枝子

う。だが、何か寂しい。私たちが還暦をこえたというのに原爆がまだ「健在」なむなしさか。手紙には「亡くなられた方々を悼む心は年々強くなりこそすれ、決して消えるということはありません」とある。そうなのだ。原爆の記憶は薄れることがない。五十年たっても、突如としてもぎ取られた生、無残な死は悲しい。慰霊祭はすすり泣きの声で溢れる。昨年の十二月九日(八日の翌日)、江ノ島のかながわ女性センターで、私もパネリストの一人となり、「女がヒロシマを語る」と言うシンポジウムを開催した(この模様は同名の題で、インパクト出版から今年八月刊行。二千六十円)。

このシンポジウムで、五歳で被爆したパネリスト・加納実紀代さんの克明な記憶に驚いた。そして、以前、永井隆博士

(女性ニュース)編集長



こんなにも核実験が…  
パネルに見入るアメリカの高校生

ロシアの青年もアメリカの高校生も訪れる  
夏休みと共に都内、近県からたくさん的高校生が五、六名のグループで展示館を見学、宿題のレポート作りに余念がありませんが、その間に縫うようにロシアから、アメリカから青年が訪れ、船の願いを共にしました。  
七月十二日、日本青年団協議会の招きで来日したロシア青年連盟の代表五名が展示館を見学、「はじめて知る核実験被害」に目を見張りました。「広島の写真を見せし街の人に折り鶴を折ってもらった」という青年はもっともその輪をひろげたいと話しました。

七月十八日には、日米文化センター高校生プロジェクトの招請でアメリカのシドウェル・フレンズ高校、ウォルト・ホイットマン高校、セント・アルバンス高校などから八名の高校生が来館、通訳やホームステイにあたる日本側の大学生スタッフと熱心に見学し、船腹下の特設教室で熱烈的に「核兵器をめぐる日米ディスカッション」を行ないました。「死の灰」がい

まも放射線をだし続け警告しているとの説明にとくに興味を示した女生徒は、「この灰が船に降り注いできたさまを想像してほしいといわれて、甲板に立って思いをめぐらした。恐ろしさがこみあげた」と語り、みんなで折ったという千羽鶴のレイを贈りました。核実験の展示パネルに心底驚いてしまったという生徒は、「私たちはほとんど教えられてこなかった。考えが変わった」と真剣な目で語りました。

【ゆめのしま発】☆編集後記☆  
夏の一日、少し早めに家を出て展示館をひとめぐり。夾竹桃、凌霄花、入り口前の真紅の九重のばら、そしてコスモスも秋の開花を待って丈をのびしている。  
二十年の歳月は広くまわりの光景を変え、展示館も緑を深くした。こうしている間にも一人、二人そして親子連れなど訪れる人はあとを断たない。きょうは山村茂雄さんを迎えての二回目の編集会議。今月号の原稿点検、次号の予定など、あとは雑談をする。  
国際司法裁判所の核使用に関する勧告の意見がだされ、広島・長崎での原水爆禁止世界大会もはじまる。八月四日には新潟県巻町の原発の是非を問う住民投票が、九月には非核法制定を求める非核ネットワークの大会がひらかれる。など動きは多い。のびていた包括的核実験禁止条約の採決も九月といわれている。  
展示館のポスターもでき、小中高校、その他にその存在を知らせるため事務局もいそがしい。最寄の地下鉄の駅にもポスターははりだされた。目で見て、手で触れ、耳で聴いて、広く一人ひとりが「核廃絶」を深く心に刻んでほしい。(S)

### 核廃絶の理想と「現実的」提案の矛盾

—パグウォッシュ会議の発足と発展(3)—

小川 岩 雄

第一回会議の成功で自信を得た科学者たちは、残された多くの課題と取り組むため、このような会議を今後も繰り返し開くことを申し合わせ、その立案と計画をラッセル卿を長とする国際的な継続委員会に委ねた。

委員会は予め行ったアンケートの結果を尊重して、大小二種類の会議を別々に開催することとし、先ず小型の第二回会議が第一回会議の翌年(五八年)の三月末日から十一日間、再びイトン氏の援助の下に、カナダの保養地ポーポー湖畔で開かれることになった。

この会議の主な狙いは、ロンドンでの国連の軍縮討議の決裂という深刻な政治状況下で、残された殆ど唯一の東西対話の場となったパグウォッシュ会議の特長を生かして、政府に影響力がある少数の科学者が相当の期間「合宿」を行い、非公開で率直な議論を続けて相互の理解を計るとともに、その

成果に基いて各国の政府に危機の打開を促すことであった。

会議のこうした性格上、参加者の二十二人の顔触れは前回とはかなり異なり、前回の参加者は九人に過ぎず、軍縮問題の専門家や現役の軍人を含む米ソ英からの参加者が多数を占めた。

日本からは誰も参加しなかったため、議論の詳細は明らかではないが、米ソが巨大な核戦力を誇示して対決している現状の下で、どうすれば当面の危機を何とか回避することが出来るか、その応急措置の具体的方法をめぐって、突込んだ議論と多くの提案がなされた模様である。

中でも米国で原爆開発を最初に提唱し、率先して推進したレオ・シラード博士らは、いわゆる「相互核抑止」の考えを初めて披露して注目を引いたという。これは米ソがそれぞれ最小限の核兵器を持ち、万一相手が核攻撃を仕かけて

きたら、相手の都市に「耐え難い」核報復ができるようにしておけば、双方とも報復を恐れて先制核攻撃を思い留まるであろう、というものである。

このいわゆる「相互核抑止」の発想は、核兵器はすぐにはなくせず、ミサイルによる核攻撃を防ぐ手段は事実上存在しない以上、現状で核戦争を避けるには、双方が相手方に核先制攻撃を断念させる(抑止)するしかない、との判断に基づくものである。米ソがほぼ互角に核対決していた当時の応急策としては、この構想には確かにそれなりの説得力があり、多くの参加者が興味を示し、間もなく米ソを始め各核保有国の政府が公式の核政策の基本理念として採用するようになった。

しかしこの方法はもともと両当事国の核保有を前提としており、しかも相手の核攻撃の意図をなくす手段として、人間性と相互信頼に基づく対話ではなく、核報復の用意を示すことによる脅しに頼るものであったため、核軍縮を少しも促さないばかりか、かえって核軍備競争の一層の激化を招くことになってしまった。

国内では情熱的なハト派で、パ

グウォッシュ会議の推進者だった科学者たちが考え抜いた苦心と善意の提案が、なぜ皮肉にも米ソの核戦力強化を正当化する論拠にされてしまったのか。その根底には核戦争の阻止という大義を目指しながら、その手段としてラッセル・アインシュタイン宣言の訴えに反して核報復の恐怖による核抑止というきわめて非人間的な道を選んだ「戦略的発想」の過誤があったのではなからうか。

とはいうものの、人間性を中心に据えた上で、状況の現実的な分析と軍縮の具体的な進め方について議論を尽くすことは欠かせない作業であり、第二回会議のような小型の会議を今後も引き続き開くことで参加者全員が一致した。

一方大型の会議については、同じ五八年の九月に、継続委員会のかねての方針どおり、二〇カ国から七十数人の参加者が出席する第三回会議がオーストリアのスキー場保養地キッツビューエルと首都ウィーンでひらかれた。主題は「原子力時代の危険性と、科学者がそれに対してなすうること」であった。

(立教大学名誉教授・協会理事)

### 雑感

#### 第五福竜丸と私

江藤 勇一郎

夢の島の第五福竜丸展示館が開設二十周年の歳月を迎えました。感慨無量です。船の保存のため尽力された方々と平和協会のご努力に深い敬意を表します。

私は、第五福竜丸保存委員会の頃、都港湾局管理部門に属し、第五福竜丸(はやぶさ丸)にかかわりました。その関係で当時の状況を少し立ち入って記してみようと思います。

三十年ほど前、第五福竜丸(はやぶさ丸)は、夢の島・ゴミ埋立区域水面に他の老朽化した漁船と共に放置され、船の墓場に埋設されることでした。船はいまの展示館の北側に残された水面岸辺に係留されていました。

当該水面は、埋立区域で、一部が残され、そこに水面占用許可申請書が都港湾局に提出されました。船の名義は江東区在住の解体屋さん(金属商)で、占用料(使用料)も納入されていました。文部省(水産大学)から廃船処分の船を

受けた人とは別人であったと記憶しています。

普通、船舶の係留は、申請があり、水面管理上の支障さえなければ、添付の図面も簡易で占用許可されています。しかしこの船の場合どういう理由か、当時としては珍しく海上保安部の許可にあたるの副申請書が添付されていたことを覚えています。船の重大さがわかりました。

この船は、夢の島に放置される前は、砂町水門(江東区)側にあったとか、旅館の宣伝物として利用しようとか、NHKがその行方を捜していたとか、いろいろな風説がありました。

私は、「赤旗」が三・一ビキニ集会前後、第五福竜丸について報じていたのを今でも鮮明に覚えています。また、職場新聞「港湾分会ニュース」が、船のことを報じていました。

私も仕事の関係で「はやぶさ丸」が第五福竜丸であることを当時の

担当者から聞き、驚き、船の保存を三・一ビキニ集会で訴えました。また、「赤旗」に投書したり、都職労、港湾支部の大会で保存の決議を訴えました。平和委員会の会員でもあったので、日本原水協事務局にも協力を求め、当初から保存に寄与していただきました。

準備段階ではいろいろな動きがありました。保存のため船の持ち主の了解を得て船を収得する必要が生じました。機関部を除いて船の母体を保存委員の大沢三郎都議(共)の個人名義で取得し、行政手続きも終えました。この件はあまり明らかにされていませんが、許可権限者であった港湾局担当部長立ち会いの下で交渉が進んだといわれています。

その後、美濃部都知事も茶山都議の議会での要請をうけ現地調査をされました。江東区民の意向をうけ地元の高木都議も都庁第一庁舎で交渉されたのを覚えてます。地元江東区の募金活動・文化運動、台風による沈没寸前の水の汲み上げ作業など、大変な苦勞がありました。

忘れられないことですが、私自身も福竜丸の写真をもってメーデーに参加し、はじめて三〇〇円程度

の募金を集めました。私は平和のための船の保存へ使命感と、東京湾で働く労働者の誇りを感じていました。

かつてのごみの島は、いま夢の島公園となり市民の憩いの場となりました。立派な公園に第五福竜丸展示館があります。ここは、ゴミの埋立て以前は、ヨシ、アシなどが繁り自然豊かな海辺でした。ほんとうの意味での「夢の島」で、泳げたくらいのきれいな海でした。最後になりましたが、ゴミの埋立て護岸工事を清掃局が施行した時、船の移動に立ち合いました。工事の担当課長が私の知人で、依頼されたのです。あの時の感動は忘れられません。何しろあの福竜丸が海上を滑るように動いたのです。生き返ったのです。

私と福竜丸は、最初から最後まで関係がありました。退職まぎわでしたが、私の職場で、この船が最初に係留されたときの凄惨図面が二十八年ぶりに発見できたからです。

核をめぐってのこの重大な時、資料の整理と展示館の拡充は緊急の課題となっています。

(元都港湾局職員)